

読む得! 在宅医療と介護の連携 第4回 ~身近な事例から~

「訪問看護」ができること

鼻から栄養を取っていたが、 口からの食事ができるまで回復したケース

脳梗塞発症後、左半身のまひで寝たきりとなり、うまく話せない症状が残った80代女性は、飲み込みができないため鼻から栄養を取る「胃管チューブ」を付けた状態で退院しました。自宅では同居の息子の介護を受けながら、ケアマネジャーのすすめによるヘルパー利用、医師による訪問診療、看護師による訪問看護*を始めました。

訪問看護では、胃管チューブ管理のほか、リハビリとして飲み込みの練習のための口や舌の運動をアドバイスし、生活に刺激がでるよう日中は車いすを利用したり、息子に積極的に声かけを続けてもらいました。こうした生活を送った結果、食事を起き上がって口から食べられるようになり、胃管チューブがとれました。また自分の意思を「お腹すいた」などの単語で伝えられるようにもなりました。*利用には医師の指示が必要です。

☆ポイント☆

- ・訪問看護では、投薬などの医療行為、健康状態の確認、^{くわくわ}口腔ケア、身体を回復させるための相談、介護者への助言を行い、在宅療養を支えます。
- ・訪問看護を希望される場合は、かかりつけの医師かケアマネジャーにご相談ください。

我孫子市在宅医療介護連携推進協議会 広報部会

☎ 高齢者支援課 ☎ 7185-1112

